

三重県専修寺蔵『三帖和讃』における字音の連濁

A Study on Voicing in the Middle of Compound Kanji Words in Shinran's *Sanjowasan* from Senshu-ji Temple, in Mie Prefecture, Japan

Isamu SASAKI

The original text of *Sanjowasan* was written from 1248 to 1253 by Shinran. The oldest hand-written copy of the text, some parts of which were copied by Shinran himself, is in the Senshu-ji collection.

The pronunciation marks attached to the Chinese characters in the manuscript were added to show their accent and sound, voiced or voiceless, by Shinran.

The purpose of this paper is to examine the voicing of kanji in the Kamakura Era by means of an analysis of the pronunciation marks added to the oldest copy of the manuscript.

From the analysis, the following results have been obtained:

1. most of the voiced letters follow those kanji which end in a nasal sound
2. most cases of voicing follow a rising accent
3. voicing is not influenced by the accent of the voiced letter
4. voicing is strongly influenced by the phrases to which the voiced letters belong

Key words : *Sanjowasan*, Sino-Japanese, *Rendaku*, nasal sound, accent, 三帖和讃, 字音, 連濁, 鼻音, 声調

〇、要旨

漢字に清濁を示す声点の詳しい加點がある三重県専修寺蔵『三帖和讃』において、漢字音の連濁について調査した。その結果、以下の點が判明した。

1. 本資料の字音の連濁は、大部分が鼻音に続く場合に見られる。
2. 連濁は、去声調の漢字の後に起こることが多い。
3. 連濁を起こした字の声調は、連濁が起こるか否かの原因とはならない。
4. 連濁するか否かは、その熟語によってほぼ決まっていた。

一、本稿の位置づけ

1. 親鸞遺文に基づく日本漢字音研究の一つとして

親鸞は、自著・自筆本の多くに詳しい注を付す。それは、当時の日本語を知るために有効なものである。本稿の筆者は、その注の中から、漢字に付された音注に注目し、親鸞の漢字音の研究を行ってきた。本稿も、その一つである。

本稿は、親鸞が漢字に加點した声点の分析によって、鎌倉時代の漢字音における連濁の実態を記述しようとするものである。

佐々木 勇

(一九九七年十月一日 受理)

親鸞遺文には、ほとんどの漢字に声点が加えられた資料があり、連濁したものとしないものとを明確に認定できる。

本稿では、単語の認定が比較的容易であることから漢字片仮名混じり文を対象とし、その中でもっとも豊富な声点加例をもつ三重県専修寺蔵『三帖和讃』(以下、本資料ともいう。)を選び、分析を試みる¹⁾。

2・漢字音の連濁研究における位置づけ

従来の研究によって、漢字音の連濁が起きる条件は明らかにされている²⁾。

まず、大きな条件は、①鼻音に続くことである。そのもとで、②去声調に続く場合に連濁となりやすいとされている。

しかし、その条件のもとでは必ず連濁するというものではない。そして、連濁しないのはどのような場合なのかは、未だ不明確である。それを知るためには、漢字のすべての清濁を判断できる資料が必要であるが、その資料は多くないからである。

このようなかで、江口泰生は、貞享版『補忘記』の漢語のほとんどに声点が加えられていることに注目し、連濁・非連濁の実態の把握と理由の考察を行なっており³⁾、貴重である。

本稿もこれに続き、鎌倉時代の実態を明らかにしようとするものである⁴⁾。

二、三重県専修寺蔵『三帖和讃』とその声点について

『三帖和讃』は、親鸞の著作である。『三帖和讃』とは、現在一組として伝えられる『浄土和讃』『浄土高僧和讃』『正像末法和讃』の総称であり、三重県専修寺蔵本は、本文の一部に親鸞自筆部分を持つ現存最古の写本である。また、本文に付された声点は、親鸞の自筆であると考えられ、一四四八年―一四二三年の間に加えられたと推定されている⁵⁾。

なお、『三帖和讃』という唱和された文章に付された声点が、どの程度当時の漢語声調・清濁を反映しているのかという疑問もあろう。しかし、

本資料には、唱和されたとは考えられない部分にも声点加えがなされている。また、他の親鸞遺文の声点と比較した場合にも、相違は指摘できない。よって、本稿の対象資料としてふさわしいものと考えられる。また、以下の検討結果がこれを裏付けるであろう。

三、本資料における連濁の実態

1・連濁例

次に、本資料中の連濁の用例を挙げる。なお、本稿では、従来の研究の用語を便宜上用い、連濁を起こした字(あるいは起こさなかった字)を「当該字」と呼び、当該字の直前の字を「前接字」と呼ぶ。

本稿で、連濁例と認定したのは、当該字の声母が中国中古音で全清または次清であるにもかかわらず、濁音となったものである。ただし、その中で、本資料及び他資料中に語頭の濁音例を持ち、日本漢字音では濁音であったと判断されるものは、除いた。また、梵語音訳も対象外とした。さらに、本資料は、呉音読中心資料であるが、若干の漢音形が見られる。漢音においては、連濁が生じにくかったことが指摘されているため⁶⁾、呉音と区別しなければならぬ。したがって、以下の考察では、漢音形を含む語を除外することとする⁷⁾。

挙例にあたっては、従来の研究成果をふまえ、前接字の韻尾音および声調によって分類する。前接字の声調は、本資料中の声点に分ける。「二

また、さらにその中を、①二字漢語・②三字以上の漢語に分ける。「二字漢語」とは、漢字を□で示し、連濁した漢字を■で示すと、□■または□□となるものである。「三字以上の漢語」とは、□□□■……または□□□□……、あるいは□□□■□□……または□□□□□■……となるものである。したがって、認定の仕方によっては三字漢語となる「非上(天)人(天)天(上)天(上)」は、二字漢語「人天」の中で連濁しているとして二字漢語「人(天)天(上)天(上)」として採り、「善(上)知(上)識(上)」は三字漢語として用例を採った⁸⁾。

A、前接字の韻尾 n

a. 前接字の声調「去声」

① 二字漢語

難^ナ思^シ(2) 人^ニ天^{テン} 人^ニ天^{テン} 恩^{オン}德^{トク}
 傳^{デン}教^{キョウ} 堅^{ケン}固^コ(2) 身^{シン}相^{ソウ} 尊^{ソン}者^{シャ}
 端^{タン}政^{テイ} 塵^{チン}點^{テン} 塵^{チン}數^{シュ}(2) 歛^{ケン}喜^キ(7)
 辺^{ヘン}際^{サイ} 禪^{セン}師^シ 禪^{セン}師^シ(2) 群^{クワン}生^{セイ}
 專^{セン}修^{シュ}(2) 精^{セイ}天^{テン} 天^{テン}親^{シン} 天^{テン}親^{シン}
 天^{テン}親^{シン}(2) 圓^{エン}頓^{トン} 真^{ジン}心^{シン} 千^{セン}中^{チュウ}

② 三字以上の漢語

(用例なし)

b. 前接字の声調「平声」

① 二字漢語

觀^{クワン}經^{キヤウ} 山^{サン}家^ケ 信^{シン}心^{シン}(2) 信^{シン}心^{シン}(26)
 信^{シン}者^{シャ} 滿^{マン}足^{ソク}(2) 算^{サン}數^{シュ} 現^{ケン}世^{セイ}
 現^{ケン}世^{セイ} 讚^{サン}嘆^{タン} 仙^{セン}經^{キヤウ} 善^{セン}巧^{キョウ}
 本^{ホン}師^シ(12) 本^{ホン}師^シ(6) 本^{ホン}師^シ 誕^{タン}生^{セイ}
 論^{ロン}主^{シュ}(3) 源^{ゲン}信^{シン}(5) 源^{ゲン}信^{シン} 引^{イン}接^{セツ}
 展^{テン} 轉^{テン}

② 三字以上の漢語

善^{セン}知^チ 識^{シキ}方^{ホウ} 便^{ベン}巧^{キョウ} 莊^{シュヤウ} 嚴^{ゲン}

c. 前接字の声調「上声」

① 二字漢語

(用例なし)

② 三字以上の漢語

聲^{セイ}聞^{モン} 僧^{ソウ}微^ミ 塵^{チン}劫^{キョク}

B、前接字の韻尾 m

三重県専修寺蔵「三帖和讃」における字音の連濁

a. 前接字の声調「去声」

① 二字漢語

音^{オン}聲^{セイ} 今^{コン}當^{タウ} 金^{コン}山^{セン} 金^{コン}色^{シキ} 心^{シン}
 三^{サン}世^{セイ}(2) 三^{サン}三^{サン} 三^{サン}者^{シャ} 三^{サン}品^{ピン}
 臨^{リン}終^{チュウ} 貪^{コン}曠^{クワン} 凡^{ホム}夫^フ

② 三字以上の漢語

(用例なし)

b. 前接字の声調「平声」

① 二字漢語

懺^{サン}悔^{クヱ}

② 三字以上の漢語

(用例なし)

c. 前接字の声調「上声」

(用例なし)

C、前接字の韻尾 ng

a. 前接字の声調「去声」

① 二字漢語

恒^{コウ}沙^{シャ}(4) 恒^{コウ}沙^{シャ} 東^{トウ}方^{ホウ} 應^{オウ}供^{クワン}(2)
 生^{セイ}死^シ(2) 生^{セイ}死^シ(3) 靈^{リヤウ}山^{サン}(2) 僧^{ソウ}都^ト
 平^{ヘイ}等^{トウ}(7) 龍^{リウ}宮^{クワン}

② 三字以上の漢語

(用例なし)

b. 前接字の声調「平声」

① 二字漢語

往^{ワウ}生^{セイ} 往^{ワウ}生^{セイ}(9) 往^{ワウ}昔^{シヤク} 往^{ワウ}觀^{クワン}

佐々木 勇

勝^{シヨウ}過^カ 勝^{シヨウ}法^{ホウ} 相^{サウ}好^{カウ} (2) 聖^{シヤウ}衆^{シュウ} (3)
正^{テイ}覺^{カク} (2) 種^{シュウ}種^{シュウ} 聽^{テイ}衆^{シュウ} 命^{メイ}終^{シュウ} (2)
講^{カウ}說^{セツ} 行^{キョウ}者^{シャ} (2)

②三字以上の漢語

(用例なし)

c. 前接字の声調「上声」

①二字漢語

恭^{キョウ}敬^{キョウ} (2) 衆^{シュウ}生^{シヤウ} (8) 衆^{シュウ}生^{シヤウ} (18) 功^ク德^{トク} (12)
功^ク德^{トク} (2) 功^ク德^{トク} (2) 功^ク德^{トク} (2)

②三字以上の漢語

若^{ニヤク}不^フ生^{シヤウ}者^{シャ} (2)

D. 前接字の韻尾 i

a. 前接字の声調「去声」

①二字漢語

乃^{ノウ}暨^{カイ}

②三字以上の漢語

(用例なし)

b. 前接字の声調「平声」

(用例なし)

c. 前接字の声調「上声」

(用例なし)

以上である。Dの一語を除き、すべて鼻音の後での例である。

鎌倉時代には、母音 i・u の後にも連濁例が存したことが知られており、本資料の例「乃^{ノウ}暨^{カイ}」(浄57-2)もその一つと考えられるが、この字については、当時の日本呉音として濁音であった可能性も考えなければならぬ。

2. 連濁と声調との関係

右の用例を、前接字の声調と連濁を起した字の声調とに注目して、用例数を数えると、次の表1の如くなる。三字以上の漢語は、例数が少ないため、表を省略した。(上の数字は異なり字数、()内の数字は延べ例数である。入声軽は、入声に含めて処理した。)

表1 連濁例(二字漢語)

計	去声	上声	平声	前接字	
				当該字	前接字
30 (60)	15 (30)	1 (2)	14 (28)	平声	平声
26 (89)	22 (41)	1 (26)	3 (22)	上声	上声
3 (41)	0	0	3 (41)	去声	去声
9 (26)	2 (2)	1 (16)	6 (8)	入声	入声
68 (216)	39 (73)	3 (44)	26 (99)	計	計

なお、「浄土和讃」・「浄土高僧和讃」・「正像末法和讃」を分けて見ても、それぞれ全体の傾向と変わらない。

①前接字の声調

先の挙例からも知られるとおり、本資料の連濁の前接字の声調は、去声調がもっとも多く、ついで、平声・上声の順である。入声につづく連濁は見られない。これは、すでに報告されている資料の結果と一致する。

ただし、延べ用例数で見えた場合、平声の後の連濁例がもっとも多く、上声の後の連濁例も去声の後の連濁例の数に迫る。これは、「信心」(28例)などの比較的用例数の多い語が存するからである。

本資料の声調を、連音上の声調変化の影響を除くために、語頭字に限つ

て調査すると、去声字は平声字の三分の一程度¹³⁾なので、去声の後での連濁が多いことが確認される。

去声の後での連濁例が多いことについて、奥村三雄は、去声は上昇アクセントであるから鼻音にアクセントが置かれるため、鼻音のソノリティが大きくなり、連濁を起しやすくなると解釈している¹⁴⁾。おそらく、その通りであろう。

上声の後での連濁例が少ないのは、呉音において、鼻音韻尾を持つ上声字自体が少ないためと考えられる。これは、鼻音韻尾を有する字の大部分を日本漢字音は二音節として受け入れたため、声調変化によって去声から上声に移ったものが少なかったからである¹⁵⁾。

② 当該字の声調

連濁を起した字そのものの声調は、平声が多く、次いで上声・入声・去声の順である。これも、他資料の結果に等しい。ここで、前接字声調の場合とは逆に、去声調が最も少なくなるのは、前接字声調の影響による声調変化¹⁶⁾の結果と解釈される。

よって、各声調の当該字数は、当時の呉音における語中声調の傾向を反映していると考えられる。したがって、当該字の声調は、連濁を起すことによって変化したとは考えられない。また、当該字の声調によって、連濁の起こりやすさに差がでるとも考えられない。

3. 連濁と漢語字数との関係

本資料において連濁を起した例は大部分が二字漢語であり、三字以上の漢語は例外的である。

これに対して、『補忘記』においては三字以上の漢語の連濁例が比較的多く存することが報告されている。この相違が何によるものかは、今後の課題である。

四、鼻音の後で連濁しない例について

1. 非連濁例

次に、鼻音に続く場合で、連濁しないものがどの程度あり、それはどのようなものなのかを調査したい。

これは、連濁について考える場合に不可欠の調査と思われる。しかし、従来の研究では、資料の制約上、非連濁例に触れられることが少なかった。左に、鼻音に続きながらも連濁を起さない字の用例を掲げる。挙例の方法は、連濁を起した字の場合と同様である。

A. 前接字の韻尾 n

a. 前接字の声調「去声」

① 二字漢語

因^シ光^{クワ} 圓^{エン} 通^ツ 尊^{ソン} 敬^{キヤウ}(2) 尊^{ソン} 敬^{キヤウ}(2)
 權^{ケン} 假^ケ 真^{ジン} 宗^{ソウ}(4) 真^{ジン} 宗^{ソウ} 真^{ジン} 假^ケ 神^{シン} 光^{クワ}
 還^{ワン} 相^{サウ}(2) 還^{ワン} 歸^{クイ} 間^{ケン} 故^コ 難^{ナン} 信^{シン} 難^{ナン} 值^チ
 難^{ナン} 見^{ケン} 玄^{ヘン} 忠^{チュウ}

② 三字以上の漢語

難^{ナン} 思^シ 議^ギ(2) 懈^ケ 慢^{マン} 界^{カイ} 身^{シン} 口^ク 意^イ
 聞^{ブン} 光^{クワ} 力^{リキ} 久^ク 遠^{エン} 劫^{コウ}

b. 前接字の声調「平声」

① 二字漢語

乱^{ラン} 失^{シツ} 信^{シン} 知^チ 信^{シン} 知^チ 問^{モン} 斯^シ 善^{セン} 本^{ベン}
 本^{ベン} 則^{ソク} 歛^{ケン} 歸^{クイ} 汾^{フン} 西^{セイ} 源^{ゲン} 空^{クウ}(17) 源^{ゲン} 空^{クウ}
 現^{ゲン} 國^{コク} 贊^{サン} 仰^{ヤウ} 難^{ナン} 中^{チュウ}(2) 面^{メン} 西^{セイ} 願^{ケン} 海^{カイ}
 鸞^{ラン} 師^シ(4) 玄^{ヘン} 忠^{チュウ}

② 三字以上の漢語

善^{セン} 鬼^{クイ} 神^{シン} 徧^{ベン} 法^{ホフ} 界^{カイ}(3) 不^フ 斷^{タン} 光^{クワ}

佐々木 勇

不_(上) 断_(平) 光_(上) 佛_(上) 願_(平) 作_(平) 佛_(上) (2)

萬_(平) 不_(上) 一_(上) 生_(上) 壬_(平) 申_(平) 歲_(平)

c. 前接字の声調「上声」

① 二字漢語

(用例なし)

② 三字以上の漢語

无_(上) 迎_(上) 光_(上)

d. 前接字の声調無表示

① 二字漢語

真宗_(上)

② 三字以上の漢語

(用例なし)

B、前接字の韻尾 m

a. 前接字の声調「去声」

① 二字漢語

三_(去) 信_(平) (2) 凡_(去) 衆_(平) 心_(去) 光_(上)

② 三字以上の漢語

大_(平) 心_(去) 海_(上) 大_(平) 心_(去) 海_(上) 大_(平) 心_(去) 海_(上)

至_(平) 心_(去) 者_(平) 金_(去) 光_(上) 明_(上)

b. 前接字の声調「平声」

① 二字漢語

欽_(平) 仰_(平)

② 三字以上の漢語

壬_(平) 申_(平) 念_(平) 相_(去) 統_(平) 念_(平) 相_(去) 統_(平)
染_(平) 香_(去) 人_(上)

c. 前接字の声調「上声」

① 二字漢語

男_(上) 子_(平)

② 三字以上の漢語

(用例なし)

C、前接字の韻尾 ng

a. 前接字の声調「去声」

① 二字漢語

光_(去) 晚_(上) 光_(去) 觸_(平) 光_(去) 澤_(平) 光_(去) 照_(平) 方_(去) 將_(上)
嘆_(去) 發_(平) 嘆_(去) 芳_(平) 清_(平) 風_(上) 香_(去) 氣_(平) 香_(去) 光_(上)

② 三字以上の漢語

未_(平) 曾_(平) 見_(平)

b. 前接字の声調「平声」

① 二字漢語

冥_(平) 官_(去) 勝_(平) 地_(上) 定_(平) 散_(平) (5) 往_(平) 生_(去)
往_(平) 相_(平) (2) 慶_(平) 喜_(平) (2) 永_(平) 劫_(平) 淨_(平) 華_(上)
興_(平) 世_(平) (2) 行_(平) 證_(平) 重_(平) 鞞_(平) 像_(平) 季_(上)

② 三字以上の漢語

无_(上) 上_(平) 尊_(上) 无_(上) 上_(平) 尊_(上) 无_(上) 上_(平) 尊_(上) 覺_(上)
慶_(平) 所_(平) 聞_(平) 清_(平) 淨_(平) 光_(上) 清_(平) 淨_(平) 敷_(上) (2)
平_(平) 等_(平) 覺_(上) (2) 平_(平) 等_(平) 心_(上) 等_(平) 正_(平) 覺_(上)
无_(上) 量_(平) 光_(上) 无_(上) 量_(平) 光_(去) 无_(上) 量_(平) 劫_(平) 壽_(平) 量_(平) 品_(平)

c. 前接字の声調「上声」

① 二字漢語

宗(平) 師(平) 衆(平) 生(平) 衆(平) 苦(平)

② 三字以上の漢語

難(平) 中(平) 之(平) 難(平) 三(平) 乘(平) 衆(平) 金(平) 剛(平) 心(平)
 無(平) 稱(平) 光(平) 佛(平) 安(平) 養(平) 界(平)

右のとおりであり、鼻音の後で連濁を起こしていない字は、八八字種(同一字でも声調が異なれば別に数えた数を仮にいう)、一五〇例である。先の連濁を起こした例が、七三字種二二二例であったから、これによって、鼻音の後であつても必ずしも連濁するわけではないことが知られる。

2. 非連濁と声調との関係

一語中で鼻音に続きながらも連濁を起こさない用例を、連濁を起こしたものと同様に、声調に注目して整理してみると、次の表2(二字漢語)・表3(三字以上の漢語)を得る。

表2 非連濁例(二字漢語)

計	去声	上声	平声	当該字	
				前接字	平声
25 (39)	11 (18)	2 (2)	12 (19)	平声	12 (19)
19 (31)	9 (16)	2 (2)	8 (13)	上声	8 (13)
4 (21)	0	0	4 (21)	去声	4 (21)
7 (7)	3 (3)	0	4 (4)	入声	4 (4)
55 (98)	23 (37)	4 (4)	28 (57)	計	28 (57)

表3 非連濁例(三字以上の漢語)

計	去声	上声	平声	当該字	
				前接字	平声
13 (14)	4 (4)	2 (2)	7 (8)	平声	7 (8)
11 (23)	3 (7)	3 (6)	5 (10)	上声	5 (10)
4 (5)	0	1 (1)	3 (4)	去声	3 (4)
5 (10)	1 (1)	0	4 (9)	入声	4 (9)
33 (52)	8 (12)	6 (9)	19 (31)	計	19 (31)

① 前接字の声調

連濁を起こさない例の前接字声調は、平声調が最も多く、次いで去声調・上声調の順である。

これを、先の連濁例と比較する。条件を同じくするために、二字漢語の表1と表2とを比べると、連濁例(表1)に比べて非連濁例(表2)は、去声調の漢字数が減っていることが知られる。それ以外は、異なり字数には大きな相違が無い。連濁例の延べ例数が多いのは、出現数の多い語が連濁例に多いためで、当該字が様々な前接字と結びついているわけではない(用例、参照)。

去声調のみ連濁例と比べて減っている点から、逆に、やはり去声調のあとの連濁例が多かったことを確認できる。

② 当該字の声調

次に、当該字(連濁を起こさなかった字)の声調について見ると、平声・上声・去声・入声の順で、用例数が少なくなる。

入声が最も少ないのは、本資料における入声字の出現数自体が少ないためである。

また、去声が少ないのは、前接字の声調の影響による声調変化の結果と考えられる。前接字に去声・上声が来ると、去声は上声に変化する。本資料中で、当該字に去声をとどめたのは、三字漢語「金ゴウ剛カウ心シン」の一例のみである。ただし、この語は、「心」が上声となつた「金ゴウ剛カウ心シン」の例を二例持つ。

上声の字が平声に次いで多いのは、右の声調変化の結果、去声から変わった例を含むためである。

平声は、元来、所属字数の最も多い声調である。本資料の語頭例に限つた調査では、平声は上声・去声を合わせた数よりも多い。

よつて、各声調の当該字数は、当時の呉音における声調の傾向を反映していると考えられる。したがつて、当該字の声調は、連濁を起こさない原因とは考えがたいことが知られる。

3. 非連濁と漢語字数との関係

前節の連濁を起こした例には、三字以上の漢語は例外的であつた。しかし、非連濁例には三字以上の漢語が比較的多く見られる。

この事実に対して、三字漢語のように見えても、親鸞の意識としては二字十一字・一字十二字の如くであつたのではないかと考えも成り立つ。しかし、「金ゴウ剛カウ心シン」¹⁷「金ゴウ剛カウ心シン」のように、本来の去声が上声になる連音上の声調変化を起こした例があり、意味の切れ目は認められながらも、やはり一語と考えて良いであろう。

本資料と同時期の『光明真言土沙勸信記』において、二字漢語に非連濁例が例外的であるのに対して、三字以上の漢語に非連濁例が比較的多く見られることが、榎木久薫によつて指摘されている¹⁷。榎木は、三字以上の漢語非連濁例の場合、当該字は複合語下位要素の一字目であることから、複合語としての熟合度が低いため連濁しないのではないかとしている。

また、江口泰生も、『補忘記』の分析において、三字以上の漢語で鼻音に続きながらも連濁が生じないのは、前接字と当該字との間に意味の境目がある場合であることを指摘している。

本資料において、この観点で分類してみると、三字以上の漢語の非連濁

例の大部分は、「難ナン思シ議ギ」¹⁸「懈ケ慢マン界カイ」のように意味上、 $\square + \square \square \cdot \square \square + \square$ となるものであるか、「身シン意イ」のように各漢字の独立性が高いものである。この点、『光明真言土沙勸信記』¹⁹「補忘記」の場合と一致する。

前接字と当該字との間に意味の境目が認められないのは、次の二語のみである。

大ダイ海カイ 染セン香カウ人ジン

五、連濁する語と連濁しない語

以上の検討によつて、本資料においても、鼻音韻尾の去声調の後で連濁が起きやすいことが判明した。しかし、鼻音韻尾の去声調の後でも連濁しない例があることも確かである。この連濁・非連濁の相違は何によるものであろうか。

これまで、前接字の調類ごとに見てきたが、〈漢字〉によつて連濁させる字・させない字、連濁する字・しない字が決まっていたことも考えられる。そこで、連濁例と非連濁例とを比較すると、この考えに反して、同一漢字を含む例が容易に見いだされる。それは、次のような例である(先の挙例と重なるため、連濁・非連濁の組の若干を掲げるとどめる。また、仮名音注・用例数は省略した)。

I、前接字が共通する例(連濁例——非連濁例)

三サン心シン 三サン信シン

行コウ者シャ 行コウ證テイ

信シン心シン 信シン知チ

勝ショウ過カ 勝ショウ地チ

善ゼン知チ 善ゼン本ホン

尊ソン者シャ 尊ソン敬ケイ

往コウ生セイ 往コウ相ソウ

本ホン師シ 本ホン則ソク

源ゲン信シン 源ゲン空クウ

II、当該字が共通する例（連濁例——非連濁例）

信^(平)者^(平)——至^(平)心^(平)者^(平)

現^(平)世^(平)——興^(平)世^(平)

千^(平)中^(平)——難^(平)中^(平)

三^(平)品^(平)——寿^(平)量^(平)品^(平)

欲^(平)喜^(平)——慶^(平)喜^(平)

本^(平)師^(平)——宗^(平)師^(平)

恭^(平)敬^(平)——尊^(平)敬^(平)

身^(平)相^(平)——往^(平)相^(平)

聽^(平)衆^(平)——凡^(平)衆^(平)

右のような例をすべて数えると、本資料における連濁例の半数にのぼる。よって、当該字を必ず連濁させる字、あるいは鼻音の後であれば必ず連濁する字といったものは決まっていなかったと考えられる。

特に、I・IIそれぞれの最初に挙げた例は、音形の上では区別が無かったものと考えられ、連濁・非連濁の理由を音韻のみに求めることは困難である。

これに加えて、決まって連濁形で出現する「信心」「功德」などの語があること、「難」「思」では連濁するが「難」「思」「議」では連濁しないことなどから、連濁するか否かは、〈語〉によってある程度定まっていたことが知られる。

それでは、どのような語の場合に連濁し、どのような語の場合に連濁しないのであろうか。

江口泰生は、『補忘記』の二字漢語非連濁例の分析によって、次のような場合に連濁しないという指摘をしている。

①「横置」のように、「AとB」の構成の場合。

②「能詮所詮」のように、対をなす場合。

③「三徳」のように、「三」が「徳」を規定する場合。

しかし、本資料の非連濁例は右の①②③に合わないものも多く、連濁例の中にも①②③に当てはまるものがあり、『補忘記』の場合とは異なるようである。

三重県専修寺蔵『三帖和讃』における字音の連濁

ただし、江口のいうように古代語の連濁の分析にも、形態音韻論的な視点が必要であることは、本資料の分析によっても明らかになったものと思われる。

六、結論

本資料の分析によって、以下の点が判明した。

1. 本資料の字音の連濁は、大部分が鼻音に続く場合に見られる。
2. 連濁は、去声調の字の後に起こることが多い。
3. 連濁を起した字の声調は、連濁が起こるか否かの原因とはならない。
4. 連濁するか否かは、その熟語によってほぼ決まっていた。

右の1・2・3は、すでに報告されている諸資料の連濁の分析結果と一致する。これによって、本資料は、当時一般の連濁現象を反映すると見ることができるといえる。そのような本資料において、4. が言えたことには意味があると思われる。

漢字音の連濁は、漢字の連続によって起こる日本語の音変化である。その分析は、単字の末尾音・声調の観点だけでは不十分であり、各語の日本語としての熟合度・意味の観点が必要であることが明らかになった。さらに多くの資料によって検討を重ねることが、今後の課題である。

注

(1) 単語の認定は、本資料中の用例・本資料の左注・親鸞の他の著作の用例及び現代の仏教語辞典による。

(2) 奥村三雄「字音の連濁について」(『国語国文』二二巻五号、一九五二年五月)、小林芳規「院政・鎌倉時代における字音の連濁について」(『広島大学文学部紀要』二九巻一、一九七〇年三月)、沼本克明「日本漢字音に於ける連濁と声調との関係」(同上三二巻一、一九七二年一月)参照。

(3) 「漢語連濁の一視点——貞享版『補忘記』における——」(『国語国文』第六

二卷十二号、一九九三年十二月。

(4) 二十年前余前に、金田一春彦は、連濁の原因を明らかにするために、個々の語の古代の清濁を明らかにすることが必要であると述べている(「連濁の解」<Sophia Linguistica> 2、一九七六年二月)。連濁の実態を明らかにした上で、本格的研究に取り組まなければならない状況は現在も変わっていない。

(5) 平松令三「三帖和讃 三冊」(「親鸞聖人真蹟集成 第三卷」<法蔵館、一九七四年>所収「解説」、同「国宝本三帖和讃の成立に関する諸問題」(「高田学報」第六十四輯、一九七四年二月)参照。

(6) 沼本克明「漢音の連濁」(「国語国文」四二卷十二号、一九七三年十二月)。

(7) 従来の指摘のとおり、本資料中の漢音形を含む語の中に連濁したものも存しない。また、一字でも漢音形を含む語の内、鼻音に続き連濁の可能性が存しながら連濁しないものには、次の語がある。

- 萬マン 川ケン 天テン 子シ(2) 君クニ 子シ 群クニ 臣シ 賢ケン 哲テツ
- 三サン 兼ケン 實ジツ 宮キヤウ 商シヤウ 上カウ 皇クワウ 卿キヤウ 上シヤウ 并ヘイ 州シウ
- 承シヤウ 久キウ 片ヘン 州シウ 片シ 州シウ 汾フン 州シウ 汾フン 州シウ
- 雲ウン 客カク 鸞ラン 公コウ 巖ガン

(8) 調査は、「親鸞聖人真蹟集成 第三卷」(法蔵館、一九七四年)に依る。所在を記す場合は、(浄6-3)とし、「浄土和讃」の六頁三行目であることを示すこととする。省略した用例の所在は、新潟大学教育学部鎌倉時代語研究会「専修寺蔵本『三帖和讃』本文語彙索引稿」(「鎌倉時代語研究」第六輯、一九八三年五月)、同「専修寺蔵本『三帖和讃』左注語彙索引稿及び漢字索引稿」(同第七輯、一九八四年五月)に依られたい。また、仮名の音注は右傍に記し、原本の朱墨・左右を区別しなかつた。当該字には、左傍に線を引いた。同一例が複数の場合は、()内にその数を示した。なお、印刷の都合上、原本の声点を(平)(上)(去)(入)(平輕)(入輕)(平濁)(上濁)(去濁)(入濁)のようを表わした。

(9) 注(2) 小林論文、参照。

(10) 当該字には、他に「キ」の音がある。これが高山寺蔵「新訳華嚴経音義」には、濁音「ギ」で出現する。「カイ」の音の他資料注音例を見つけたい。

(11) 注(2)に同じ。

(12) 繰り返し連濁例で出現する主な語には「信心」のほか、「衆シュウ生セイ」(26例)「師シ本ホン」(18例)「功コウ徳トク」(1例)「功コウ徳トク徳トク」(合わせて16例)「往ワウ生セイ」(8例)「源ゲン信シン」(6例)などがある。これらは、本資料では、原則として連濁する(衆シュウ生セイ)「往ワウ生セイ」の各一例が例外となる。これらの語は、院政・鎌倉時代の複数の資料に連濁例を拾えるものであり、すでに連濁の形で、定着していたものと見ることができ。

(13) 高松政雄「吳音声調——親鸞の場合——」(「岐阜大学教育学部研究報告 人文科学」第二六卷、一九七八年二月)参照。

(14) 注(2) 奥村論文。

(15) 沼本克明「平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究」(武蔵野書院、一九八二年)第一部第五章、参照。

(16) 沼本克明「毘富羅声の機能」(「国語学」第八四集、一九七一年三月)。

(17) 「光明真言土沙勸信記における字音の清濁について——連濁に関する考察を中心として——」(「東洋大学短期大学紀要」第十九号、一九八七年十二月)。